

はしがき

ハンガリーといえば、なにより首都ブダペストの美しい街並みが思い出される。そう、ドナウ河の岸に壮麗な国会議事堂があり、丘上のキリスト教会や古城も見渡せる、かの街並みである。

ハンガリーの魅力は、むろん首都の美しさにとどまらない。煮込み料理のグヤーシュや地方産ワインは味わい深く、のんびり寛げる温泉も点在する。

中欧の内陸国であるハンガリーは、多くの国と国境を接する。北隣りのスロバキアから、時計回りにウクライナ、ルーマニア、セルビア、クロアチア、スロベニア、オーストリアと実に7つを数える。北海道よりもやや広い国土に970万人ほどが居住し、機械工業、化学、農業、畜産業が盛んである。近隣の国々と2004年に欧州連合（EU）に加盟したこともあり、EU 諸国との経済関係がとくに強い。

このようなハンガリーに、稀代の男性政治家が現れた。オルバン・ビクトルその人である。同国では、日本と同じくしばしば名字が先に来るため、オルバンが名字、ビクトルが個人名ということになる。1963年にブダペストに程近い土地で出生したオルバンは、反ソビエト連邦・反共産主義の若き闘士として名を馳せ、冷戦が終結して10年と経たない35歳の時に首相に就く。そののち下野することもあったが2010年に再び咲き、延べ16年以上にわたりハンガリーにおいて権力を握り続けてきた。

本書がオルバンに注目するのは、彼のハンガリー施政が、EU で重んじられる民主主義、人権の尊重、法の支配といった価値に違反し続けたからである。

オルバンの施政がEU の価値に照らして問題であることは、ヨーロッパとハンガリーを専門とする法学者や政治学者らによってたちまち指摘されるようになった。それとともに問われるのは、そうした問題が指摘されながらもEU が適切に対応できなかったという事実である。

ハンガリーという国の魅力について冒頭で触れたが、それ以上に筆者を魅了

するのが同国に生きる人々の熱情である。1956年のハンガリー革命は、当時の共産党政権とその背後にあるソビエト連邦への強烈な異議申し立てであった。東ドイツの人々をオーストリアに越境させた汎ヨーロッパ・ピクニックは、ハンガリーであったからこそ生じたであろう画期的な出来事であった。旧東側陣営の国として迅速に民主的な選挙に移行したのも、そして、西側を象徴する文書であったヨーロッパ人権条約に逸早く加入を決めたのも、他ならぬハンガリーであった。

このような人々の熱情は、近年はどのような形で存在し、そして表出しているのだろうか。

筆者はこれまで、EUの意思決定の仕組みやヨーロッパ次元での人権保護のあり方を理解することに時間を割いてきた。その一方で、EUに加盟する国々の政治や社会の堅実なウォッチャーであったわけではない。ハンガリーについてもその例外ではないが、それでも同国の人々の鼓動は、ほとんど常に筆者の気持ちをざわつかせている。